

平成21年5月19日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2006～2009
課題番号：18251012
研究課題名（和文） 東南アジア平原地帯における複合的な資源利用とその持続的
発展に関する研究
研究課題名（英文） Resource use complex and its sustainable development in Southeast
Asian Plains
研究代表者
野間 晴雄（NOMA HARUO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：00131607

研究分野：人文地理学，アジア地域論

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：生物資源，市場経済，天水田農村，ラオス，タイ，地域社会，食生活，学校

1. 研究計画の概要

（1）東南アジア大陸部に位置する天水田農業を主体とした不安定な自然環境における平原地帯の自給的な農村における，多品種の稲や植物，魚介類や昆虫など様々な動植物資源の栽培・採集・販売などの複合的な資源利用の実態とその変化のプロセス，成立条件を東北タイドンデン村とラオスのヴィエンチャン平野ドンクワイ村の2つの村落での定着インテンシブ調査から，文融合をめざした学際的研究組織で明らかにしようとするものである。

最終目標は，東南アジア平原地帯に共通する複合的資源利用の特徴を明らかにし，グローバルな市場経済の影響下におけるこの地域の複合的な資源利用の持続性について，天水田農村という共通した東北タイ，ラオスでの地域社会で比較検討することである。

（2）調査内容は，住民の生業活動，資源利用，農業生産，食料・栄養調査，村落経済における非農業部門の貢献度調査，立地形成に寄与する自然環境調査，開田史と塩採取の実態調査，村落社会のなかの学校での資源利用や子どもの環境観，環境意識の変化などである。いずれの地域においてもほぼ共通する全戸世帯調査によって基本的な家族構成，移動歴，農地所有，農外就業，所有物/インフラなどで，それらを視覚的にかつ継時的に分析するツールとして，GISやGPSを用いる。

さらに異なる生物資源利用の相互関係と，多様化する就業形態と資源利用との相互補完関係を分析する新たな理論的枠組みを構築することをめざす。

2. 研究の進捗状況

（1）各人の分担項目については，毎年，1～2回の全体会議を開いて意見の統一，予算の利用方法についてコンセンサスをとる。各人は両村落で借りている家を拠点に，現地アシスタントとともに寝食を共にしながら密な連絡をとりあい調査を実施している。

（2）カウンターパートであるライス国立大学からはすでに2名の研究協力者を短期に招聘し，名古屋大学地理学教室との学術交流協定が結ばれた。

（3）中間総括として，2008年1月16～17日にタイ国コンケン大学教育学部で，日本とタイの分担者，研究協力者に加えて，ラオスの国立農林業研究所，ラオス大学の研究協力者，ドンクワイ村，フアシアン村の中学校長，ドンデン村の小学校長，村落委員などを交えて，国際シンポジウムを開催し，その資料として英文プロシーディングを刊行した。今後の方針として，共通のチェック項目や実質的な比較の視点の重要性を確認した。

（4）インドシナ半島の平原という生態環境の比較の観点から2009年3月には分担者9名でカンボジア平原タケオ，トンレサッ湖岸の広域調査をカンボジアのNGO，農業省の協力を得て実施した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

毎年1～2回の全体会議，各人あるいはグループでの東北タイ，ヴィエンチャン平野の農村での調査を分担者，研究協力者がほぼ最

低1度、多くは複数回、夏休みと冬～春休みを中心に調査を実施しており、それを国内外の学会、国際シンポジウムで発表している。さらにプロジェクトとして、2008年1月にコンケン大学でタイ、ラオス、日本の研究者、調査地域の住民代表、政府役人などが一堂に介した国際シンポジウムを開催した。

本プロジェクトの収集データをもとにした研究協力者2名が博士学位を取得、5名が修士学位を取得した。また、啓蒙的な図録をはじめとする一般向け著書、論集に多くの分担者が寄稿している。

4. 今後の研究の推進方策

各人、各分担分野での資料収集・分析はほぼ8割以上完了しているが、全体をまとめるシナリオと2地域の収集データの比較分析作業と成果の最終報告をいかなるかたちで行うかの検討が残されている。最終年度はこの2点に集中したい。現時点では次年度に関西での国際シンポジウムを開催して、その成果をもとに、論集を日本語で出版し(2010年度末)、その後に英文での報告書を考えている。また、カウンターパートとなったタイ、ラオスの研究者の日本への短期招聘(今年度申請予定)によって、この報告書作成への深化を図ろうと考えている。

5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕(計32件)

1. 西村雄一郎・岡本耕平・ブリダム ソムキット「ラオス首都近郊農村におけるGPS・GISを利用した村落住民の生活行動調査」, 地学雑誌 117(2), 2008, 568-581 頁, 無
2. 野間晴雄・岡田良平 東北タイ農村40年間における小学生の意識変化—ドンデン村を事例として—, 史泉 (関西大学 史学・地理学会) 105号, 2007, 1-15 頁, 有
3. 舟橋和夫・柴田恵介「東北タイ農村ドンデン村における村落経済の変動」, 龍谷大学社会学部紀要第30号, 2007, 55-71 頁, 無
4. Miyagawa, S. T. Tsuji, K. Watanabe and K. Hoshikawa. Long-term and spatial evaluation of rice crop performance of rain-fed paddy fields in a village of Northeast Thailand, TROPICS, Vo.15(1),2006, pp. 39-49. 有

〔学会発表〕(計37件)

1. NOMA H. Sustainable Resource Use and Management in Lao Lowland and Northeast Thai Villages under the Contemporary Economic Transition:

Comparative Integrated Rural Studies, 2008年1月16日, Khon Kaen University, Thailand

〔図書〕(計22件)

1. 野中健一編 『ヴィエンチャン平野の暮らし—天水田村の多様な環境利用』, 2008 (分担執筆として, 宮川修一, 鱒坂哲朗, 池口明子, 岡本耕平, 西村雄一郎, 宮川修一, 加藤久美子), めこん, 51-69,73-94,191-212,213-231

〔その他〕

ドンデン村, ドンクワイ村での村人への調査活動の公開を兼ねた展示, 映写会を実施し, 村人との良好な関係を維持している。